この想いの名前は知らない

この想いの名前は知らない<後編>

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=15183463

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, R-15, モルグ, ダイ大小説50users入り

不死騎団長ヒュンケルと人質マァム。後編。
直接的な表現はありませんが、間接的な表現はありますので、R-15とさせていただきます。
また、性被害についての描写や考察がありますので、苦手な方は１ページ目を飛ばしてください。
ほかの作品とはつながらない独立の物語です。

Table of Contents

この想いの名前は知らない<後編>

　まだマァムが故郷のネイル村にいたころ、村の大人に、こんなふうに声をかけられたことがあった。
「マァム、大きくなったなあ。」
　その頃、まだ１２歳だったマァムは、きょとんとした目で相手を見た。成長を祝ってもらっているのだと思い、彼女は、腕まくりをして、見せてみた。
「背も伸びたしね。力だってこんなに。私でも、村を守れるわよ。」
　だが、相手の男は、含みのある笑みを浮かべた。よく知っている村の中年だったが、そのときは、マァムは、なぜかその笑顔を不快に感じた。
「そうだなあ。・・・こっちのほうも、大きくなったなあ。」
　そう言って、中年の男性は、自分の胸元で、手で形を作り、マァムの胸元を、下衆な笑みを浮かべて眺めた。
　乳房が大きくなったことを言われたのだと思い、マァムは気持ち悪く思った。とたんに彼女の顔が曇った。
　すると、中年の男は、すぐにまた言葉を継いだ。
「冗談、冗談だよ。
　まぁ、でも、それだけ立派なんだから、そいつで敵をひるませるってのもありなんじゃないか。」
　品のない笑顔を浮かべ、マァムの前を立ち去りながら、下衆な言葉を吐いていった。
　まだ幼かったマァムは、相手の意図を図りかね、とっさに文句を言うことも、反撃することもできなかった。
　ただ不快な感情だけが、マァムの胸の中に残った。

　ロモスの城下町に行ったときのことだった。
　その日は市場が立っていて、広場は大勢の人でごった返していた。
　まだ１０歳だったマァムは、母のレイラと市場に来ていたが、人

ごみの中、母の手を放し、はぐれてしまった。
—母さん、どこ？
　マァムは不安を抱えたまま、人の波をかき分け、母を探した。
　不意に、その時、背中に誰かの手の感触があった。
　母かもしれないと思い、マァムは振り返ろうとした。
　しかし、マァムが振り返るより早く、マァムの衣服の上から、マァムの臀部を触る手の感触を感じた。
　マァムは、不快と恐怖で身動きが取れずに固まった。すると、今度は背後から両手が伸びてきて、マァムの両乳房をわしづかみにした。
　マァムは悲鳴を上げたかったが、恐怖ですくんで声も出なかった。
　自分の身をかばって、とっさに、前かがみにしゃがみ込むのが精いっぱいだった。
　涙があふれてきた。
　そのマァムの背で、誰かが舌打ちする音が聞こえた。

　どうしてこんなことができるのだろう。
　私の体は私のものなのに。

　同じ年頃の少女たちに比べて、少しばかり成長が早く、そして少しだけ豊満であった彼女に対し、投げかけられる無遠慮な言葉や視線は、枚挙にいとまがなく、あろうことか、直接体に手を伸ばされることさえもたびたびあった。
　そんなときに、男たちが彼女に見せる目の中にあったのは、剝き出しの性欲だった。
　マァムは、男たちの持つ、そんな視線が嫌だった。
　彼女をただ、「女の体を持つもの」としてしか扱おうとしない男たちを、マァムは嫌悪していた。

　マァムは、ぼんやりと目を開けると、しばし、まどろみに身を任せていた。
　体が柔らかい寝具に包まれており、心地が良かった。昨日まで寝

ていた、冷たい牢とは異なっていた。
　ふと、肌寒さを感じ、裸の肩に毛布を手繰り寄せ、身を縮めた。
　滑らかな上質のシーツの感触が心地よい。
　まだ夢見心地の頭のまま寝返りを打つと、傍らに、人の体温を感じてどきりとした。
　頭の中を昨日のことが駆け巡り、急に意識が覚醒をする。
　目を閉じて、自分の身体に語り掛けると、体の奥に鈍い違和感を覚えた。その感覚は、彼女の身体が昨日までとは変わってしまっているのだと、はっきりと彼女に告げていた。
　だが、嫌な気持ちはなかった。
　後悔もなかった。
　傍らの温かさに手を伸ばし、上目遣いにその主を見上げた。
　少し顔を背けているが、艶のある銀の髪が額から流れ、すっきりとした鼻梁が通るのが見て取れる。
　目を閉じている様子からすると、まだ眠っているのだろうか。
　マァムは、ヒュンケルの横顔を眺めているうちに恥ずかしさを覚え、目を伏せた。
　しかし、それでも彼に触れたくなり、マァムは、ヒュンケルの裸の胸にそっと、自らの額を押し当てた。
　温かい。
　昨夜、何度も確かめたはずなのに、そのぬくもりを感じたいと思ってしまう。
　目を閉じると、遠くから、一定のリズムを刻む鼓動が耳に響いた。
　それは、彼が確かに生きているのだと、強くマァムに語り掛けた。
　彼のぬくもりと鼓動が、マァムを安心させ、落ち着かせる。いつまでもこうしているのが当たり前のような、そんな錯覚を覚えた。
　マァムは、昨夜、彼の部屋に招かれた後のことを思い出していた。
　突然、ヒュンケルに唇を奪われ、この寝台の上に押さえつけられたときは、マァムも恐怖を覚えた。
　この人は、そんなことはしないと一方的に信じていた思いが裏切

られた気がした。
　だが、自分を見下ろすヒュンケルの眼差しを見上げたとき、マァムはそこに意外なものを見た。
　彼の目にあったのは、剥き出しの性欲でもなく、マァムを「女の体を持つもの」というだけの存在として扱う意志でもなく。
　そこにあったのは、かぎりない切なさ、だった。
　手を伸ばしたいと渇望する何かを見るかのように、大切だけれども得難い何かを見つめるように。
　その言葉からも、眼差しからも、彼が本当に欲しているのは、マァムの「女の体」ではないのだと、マァムは理解した。
　そして、彼は、最後の決断をマァムに預けた。
—いやなら、振り払え。
　不器用な言葉だったが、挑発するような響きはなく、確かにマァムの意志を聞いていた。
　そして、実際に、マァムの懇願を受けて、彼は、マァムの手首をつかんだ手の力を緩めた。
　もし、あのとき、マァムが必死に拒絶すれば、おそらく今のようにはならなかったのだろう。マァムはどこかで起こらなかった未来を確信していた。
　だが、マァムはヒュンケルに手を伸ばした。
　ヒュンケルがマァムに求めたものは、いままでマァムが出会ってきた男たちと比べ、たとえようもないくらい大きなものであったのに。あれほど、男たちの目線をマァム自身が嫌悪していたのに。
　マァムは、彼を抱きしめたいと思った、自分の気持ちを何と呼んでいいのか、わからなかった。だが、その思いは確かにマァムの中に存在していた。
　日が変わった今になっても、それに変わりはなかった。
　マァムは、しばし、ヒュンケルの胸に身を預けていたが、不意に、髪に手の感触を感じた。
　大きな武骨な手が、ゆっくりと、マァムの髪をなでる。
　よく、父さんがこうしてくれていた。
　子どものころの記憶がよみがえり、懐かしさを心地よく感じた。
　マァムは、手の主に、声をかけた。

「ごめんなさい、起こしちゃった？」
「・・・いや、始めから起きていた・・・。」
　ということは、さっき見つめたときには、目を閉じて寝たふりをしていたのだろうか。
　ぽつりとつぶやくヒュンケルの言葉に、マァムは彼の意外な面を見た気がして、くすりと笑った。
「・・・どうした？」
　マァムの意図が読めないヒュンケルがいぶかしげに尋ねると、マァムは短く答えた。
「ううん、なんでもない。」
　そうして、また、彼のぬくもりに身を任せた。
　ヒュンケルは、背中を上げ、マァムに向けて半身を起すと、腕の中で彼女を守るようにそっと抱きしめた。
　マァムは、横を向いたまま、ヒュンケルに抱きしめられた。
　まだ、二人とも、一糸まとわぬ姿であったため、素肌が直接触れ合った。その感触が心地いい。
　マァムは、恥ずかしくなって、そのまま彼の胸に顔をうずめた。
　ヒュンケルの、遠慮がちな声が聞こえた。
「・・・体は、大丈夫か？」
　彼の意図を察したマァムは、小さくうなずいた。
　恥ずかしくはあるが、彼の気遣いが、マァムの目頭を潤ませる。うれしかった。
　ヒュンケルは、申し訳なさそうにマァムにささやいた。
「すまなかった・・・その・・・やりすぎた・・・。」
　彼の戸惑った様子と、その言葉が、いっそうマァムに恥じらいを覚えさせた。
　昨夜のことが克明に脳裏に蘇り、マァムは、彼の顔を見ることもできず、ただ懸命に首を横に振った。
　ヒュンケルは、腕の中のマァムの左頬にそっと指を伸ばした。
「・・・ここも、痛かっただろう。すまなかった・・・。」
　牢で彼が叩いた箇所に触れながら、ヒュンケルは、マァムに無体をわびた。
　マァムはまた、首を横に振った。

ヒュンケルは、マァムの背に腕を回し、彼女の身体を抱きしめた。
　そして、マァムは、背中に回された彼の腕にほんの少し、力が入るのを感じた。
　その抱きしめ方の一つにさえ、彼の心遣いを感じた。
—ヒュンケル様は、お優しい方です。言葉どおりの意味です。
　マァムは、モルグの言葉を思い出していた。
　今なら言えるだろうか。
　今なら、この手が届くだろうか。
　マァムは、そっとささやいた。
「ヒュンケル・・・私、あなたのそばにいたい・・・。」
　昨夜とは少し異なる表現で、似た意味の言葉を告げた。
　ヒュンケルは何も言わず、先ほどと同じように、マァムの髪をゆっくりと撫でた。
　その手の温かさに、マァムは肯定の意思を期待した。
　マァムは、顔を上げた。
　急に面を上げたマァムに驚いたように、ヒュンケルがわずかに目を丸くした。
　マァムは、昨夜のように、まっすぐにヒュンケルを見つめて言った。
「あなたに故郷も家族もないのなら、私があなたと一緒にいる。私があなたの居場所になるわ。」
　マァムは、ゆるぎない意志を持って、ヒュンケルに訴えかけた。
　ヒュンケルを取り戻したい。
　ヒュンケルに、そばにいてほしい。
　ただその思いを胸に、マァムはヒュンケルの心の奥に向かって呼びかけた。
「だから・・・お願い・・・人間の世界に帰ってきて・・・。」
　ヒュンケルは、昨夜と同じように、自分をまっすぐに見つめるマァムの眼差しを受け止めていた。
　視線を外すこともせず、マァムと同じように、彼女を見つめ返していた。
　やがて、彼はゆっくりと、寝台の上に半身を起し、起き上がっ

た。彼の裸の胸が、外気にさらされた。つられて、マァムも、胸元を毛布で押さえながら身を起した。
　マァムから視線を外し、ヒュンケルは、しばらく無言でいたが、やがて、寂しそうな笑みを浮かべた。
「・・・それは無理だ。」
　その言葉に、マァムの胸の奥が冷たくなった。冷水を浴びせられたような気がした。
　ヒュンケルは、その目に理性の光を宿らせて、真剣な面持ちで言葉を紡いだ。
「俺には責任がある。
　不死騎団長として、俺の下にいる何百ものアンデッドたちを守る義務がある。
　たとえ、命なき者と言われようとも、あいつらは、確かな意思を持ってここに存在している。
　それを、見捨てることなど、俺にはできん。」
　マァムの心を打った彼自身の言葉が、今度は、二人の間に壁となって立ちはだかった。
　マァムは、それ以上、説得する言葉を紡げず、沈黙するしかなかった。
　そんなマァムに視線を戻し、ヒュンケルは、また寂しそうに彼女を見つめた。
　ぽつりと、ヒュンケルはつぶやいた。
「俺がダイを殺したら、お前は俺を恨むのだろうな。」
「・・・ヒュンケル・・・！」
　マァムが悲鳴のような声を上げた。
　ヒュンケルは、マァムの髪に触れ、そっと、マァムに口づけた。
　柔らかい、優しいキスだった。
　ヒュンケルは、そのままマァムから視線を外すと、寝台から下り、床に脱ぎ捨てた自身の服をつかんで、裸の肩に羽織った。
　そのまま振り返らず、マァムに声をかけた。
「お前の着替えは、ここに置いてある。しばらくしたら、モルグを使いによこす。それまではこの部屋を使っているといい。」
　ヒュンケルはマァムに事務的に告げると、いつの間にかドアの前

に用意されていた彼自身の着替えを手にして、振り返らずに寝室を出て行った。

　マァムは、新しい部屋に通された。
　昨日までいた牢とは異なり、上質な調度の揃った個室だった。
　テーブルセットも、クローゼットも、寝台も備え付けられ、広さこそ、ヒュンケルの寝室の半分程度ではあったが、ダイたちと宿泊したロモスの宿屋とは比べ物にならないくらいの十分な設備と空間を誇っていた。敵の捕虜ではなく、客人としての待遇なのだろう。
　マァムはその部屋で、寝台に腰掛けながら、この先のことに思いを馳せていた。
　どうしたら、ダイとヒュンケルの戦いを止められるだろうか。
　先ほど、ヒュンケルは、「責任」という言葉を使った。
　大魔王への忠誠ではなく、部下たちに対する義務だと。
　そして、モルグがヒュンケルの部屋に運んでいたあの盆の上のもの。
　ひとつは水の入った水差しだったが、その水差しとは柄違いのグラスに入っていたのは、明らかに酒だった。それも、その臭気から、かなりアルコール度数の強いものだとわかるような。
　マァムは、この部屋に来るまでのモルグとのやり取りを思い出した。

　グラスの中身が気になったマァムは、ヒュンケルの部屋に彼女を迎えに来たモルグに尋ねた。
　モルグはにべもなく答えた。
「寝酒でございますが、何か。」
　当然のような回答に、マァムは戸惑った。
「あれって、かなり強いお酒よね・・・。それを、毎晩？」
「はい。まあ、１杯程度ではございますが。」
「・・・いつからなの？」
「パプニカ侵攻が始まった頃でございましょうか。」
　モルグの回答を聞き、やはり、人間の社会を攻めることは、ヒュンケルの負担になっているのではないかと、マァムはそう思い、

思った通りのことを口にした。
「ヒュンケルも人間だから、彼は、人間の国を攻めることがつらいんじゃないかしら。」
　すると、モルグは、マァムの意見に賛同しかねるように、言葉を紡いだ。
「どうでございましょうか。
　その前の、ハドラー様が凱旋された頃から、ヒュンケル様は、いらだちを募らせてはいらっしゃいますがね。」
　ハドラーの「凱旋」と聞いて、マァムは思い当たった。冷たい汗が背を流れ、その事実を初めて聞いたときの、嫌な記憶がよみがえる。アバンを殺したときのことを指しているのだと、マァムはすぐに理解した。
　その頃から、ヒュンケルがいらだちを募らせている、とは、アバンの死が、彼の心を波立たせたのに違いなかった。
「・・・ハドラーが、勇者を倒したときのこと・・・？」
　マァムは慎重に言葉を選んで口にした。アバンの死を言葉の上でも口にしたくはなかった。
「はい。
　一報が入りました時には、ヒュンケル様は真っ青になられて・・・その夜は、大変でございました。
　翌朝見ましたら、お部屋の調度という調度が破壊されておりましたからね。片づけるのと、新しいものをあつらえるのとで、いやいや・・・骨を折りましたよ。」
「どうして・・・？」
「ご自分の手で、勇者の息の根を止めたかったから、ではございませんかね。」
　その言葉に、マァムは違和感を覚えた。
　モルグは、続けた。
「むしろ、パプニカ侵攻が始まってからは、その頃のいらだちが落ち着いておられるようにも感じますよ。
　ただ、戦場に出ると、気が高ぶりますから。それを落ち着かせるための寝酒なのでございましょう。」
　なんでもないことのように、モルグはそう言った。

マァムは、納得できない気持ちを抱えていた。
「昨日は手を付けていなかったわ。」
　すると、また、モルグはなんでもないことのように答えた。
「お嬢さんがいらっしゃったからでございましょう。
　あの方は、落ち着いて眠っていらっしゃいましたか？」
　モルグは、昨夜、二人の間に何があったのかを十分把握しているかのような口ぶりだった。側近と主とは、通常、そのような間柄なのだが、平民のマァムには慣れない習わしだった。
　マァムは恥ずかしくなって、遠慮がちに答えた。
「・・・ええ。」
　すると、モルグは、笑みを浮かべた。
「それならば、ようございました。
　あの方は、うなされていることも多くありますからね。」
　モルグの言葉に、もし、自分が一緒にいることで、そのときだけでも、ヒュンケルが心安らかにいられたのであればよかったと、マァムは思った。
　そんなマァムの心情を知ってか知らずか、モルグは独り言のようにつぶやいた。
「もし、お嬢さんが、このままヒュンケル様のお側にいらっしゃってくださいましたら、あの方も少しは安らげるかもしれませんな・・・。」

　マァムは、モルグとの会話を思い出しながら、その言葉が意味するところを探ろうとしていた。
　うなされることが多くある、とは何が彼をさいなんでいるのだろうか。
　毎晩強い酒を口にしなければ眠りにつけないほどの気の高ぶりは、何に由来するものなのだろうか。
　そして、アバンの死を聞き、部屋の中を破棄しつくすほどのやり場のない怒りは、いったい、どこから生じていたのだろうか。
　マァムが思案に暮れていると、遠くから鳥の鳴き声がした。
　しかし、ここは地下に作られた地底魔城。マァムが今いる部屋は、その奥深くにある。鳥などいるはずがない。

聞き違いかと思ったその時、マァムの部屋の通気口から、光が飛び出した。
　マァムは息をのんだ。
「ゴメちゃん！」
　昨日、ダイとポップへの使いに出した、小さな仲間が通気口を通って帰ってきていた。
「よくここがわかったわね。私、部屋が変わったのに。」
　ゴールデンメタルスライムは、誇らしげに甲高い声で鳴いた。きっと、マァムのいるところを探し回ってくれたのだろう。
　彼は、自分の右の翼をマァムに示した。見ると、その翼の根元に小さな筒がくくりつけられていた。紙を丸めたものだった。
　ダイたちからの手紙だ。
　マァムはすぐに翼の根元から手紙を外して、広げた。
　手紙には、殴り書きのような、急いで書いたと思われる筆跡で、マァムへの短いメッセージが書かれていた。
「バッカヤロー、５日なんて待てるかよ！
　今日、迎えに行く。脱出の準備をしておいてくれ。」
　ポップの字で、そう書かれていた。マァムは思わず声を上げた。
「え、ちょっと！早すぎるわよ、ポップ！」
　マァムはここにいない仲間への不満を口にしたが、当然、届かない。マァムは困ったように、小さな仲間を見上げた。ゴールデンメタルスライムは、不思議そうにマァムを見つめた。
　もう迷っている時間はなかった。
　マァムは、すぐに意志の強い光を目に宿らせて、毅然とした面持ちで呼びかけた。
「行こう、ゴメちゃん。一緒に来て。この戦い、止めるわよ。」
　マァムの言葉に呼応するように、ゴールデンメタルスライムは、ピイっと甲高く、力強く鳴いた。マァムは笑みを浮かべた。その小さな鳴き声さえも心強い。
「ありがとう、ゴメちゃん。まずは、私の武器を探さないとね。」
　マァムは、小さな仲間を左肩に乗せ、強い決意を胸に、勢いよく廊下へと続くドアを開けた。

その先に、彼らアバンの使徒４人が肩を並べあう、その未来があると信じて。